特別講演　～人材育成セミナー～　パネリスト

沖縄県における臨床検査技師育成と血液検査ネットワークの構築を目指して

大川　有希
沖縄赤十字病院　医療技術部　臨床検査課

臨床検査技師の育成には、大きく分けて卒前教育と卒後教育（生涯教育）がある。前者は大学・専門学校などの専門教育機関での教育と医療機関等での臨地実習、後者は医療機関や臨床検査所等での実務および臨床検査技師会や各種学会での学術活動などである。今回の人材育成セミナーでは、それぞれの技師教育の場面における研修プログラムや評価法、指導者に求められるものなどを皆さんと一緒に考えたい。また、これまで技師教育に携わってきた発表者の経験と人材育成に関するアンケート調査を踏まえ、沖縄県臨床検査技師会（沖臨技）臨床血液部門の人材育成の現状と今後の展望についても報告する。

沖縄県での臨床検査技師の専門教育機関は琉球大学医学部保健学科の１校のみである。琉球大学では、平成 29 年度からの 4 学期制の導入を機に、臨地実習の在り方を検討し、県内の医療機関の技師長との懇談を経て、これまで短期に分割していた臨地実習を 8 週間に集約して実施する方針となった。一方、臨地実習の受入れ医療機関では、忙しい業務の傍ら充分な対応が出来ない施設もあると推察され、学生の満足度は高くない懸念がある。臨地実習は学生にとっては医療現場の体験や学習の場であるが、同時に受入れ施設にとっても指導を通して成長できる好機である。また、学生にとって魅力的な職場であれば、将来良い人材の確保に繋がると考える。学生に選ばれる職場でありたい。

卒後教育にあたっては、目標設定と振返りの重要性を実感している。施設によっては、研修プログラムがなく、指導は各部門に任されていて、指導者による指導内容の偏りも指摘されている。まずは自施設の目指す技師像を明確にした上で、研修プログラムを作成し、研修担当者の任命と部門全体での意思統一を図り、目標設定と達成度の確認のために研修チェックリストの活用と振返り面談の実施が望ましい。当院での新卒技師の研修は、研修責任者（研修全体の把握とアドバイス）、研修担当者（実際の指導や面談の実施）、被研修者（新卒技師）を屋根瓦式に配置し、原則週１回の面談による振返りと次の目標設定をしている。指導する担当者は若手の技師を任命し、指導することで自身の成長にも繋げる。血液・輸血部門では、週１回の形態カンファレンスや輸血療法委員会などを通して積極的に医師や他職種とのコミュニケーションを図り、臨床検査データと診療の関わりを学ぶ場としている。

沖臨技の会員は、2016 年 6 月現在約 750 名と増加傾向にあり、臨床血液部門では、月１回の定例会と年に数回のセミナーを行っている。県中部以北の施設は、距離的な制約から参加困難との意見も多く、今後の課題である。県内の医療機関では、異動などにより熟練した血液担当技師が育っていない現状があった。昨年、臨床血液部門では血液検査の外部研修の要望を受け、受け入れ可能な施設を探して技師派遣を援助し、当院でも約 3 カ月間で 3 名の外部研修を受け入れた。各種認定資格の取得を希望する技師も多く、試験対策の要望もある。末梢血や骨髄標本の供覧など症例の相談も受けているが、全県的により気軽に相談できる、医師も巻き込んだ血液検査ネットワークの構築を目指して模索中である。